新作 blomst【ブルームスト】

THREE STORIES *of* ROYAL COPENHAGEN

ロイヤル コペンハーゲン 3つの物語

第2話

「君のためにいま僕が出来ること」 辻 仁成

二人の間に置かれた牡丹柄のポットに君がロータスのティーバッグを入れてからすでに三分が過ぎている。繊細な絵柄は熟練の職人の手によるもので、まるでデザイナーの心模様がそこに写し描かれているよう。フランスが宗主国であったベトナムの古都を知り合ったばかりの二人は旅した。蓮池の畔の歴史あるホテルのラウンジで飲んだロータス茶が君のお気に入りとなった。誕生日のプレゼントを探していた僕の目にこのポットが止まった。ツリーピオニー（牡丹）の柄もそうだが、華奢な把手が気に入り一目ぼれした。

「どうしたの？」仕方が無いので僕がポットを掴み、お茶をカップへと注いだ。濃く出過ぎたら台無しになる。何事も丁度いい頃合いというものがある。「いえ、なんでもないわ」と君は呟き、カップに口をつけた。「このポットで淹れるとさらにおいしいね」僕は嬉しくなって付け足したが、君にそっぽを向かれてしまう。その視線の先にあの古都の淡い光りが翻った。

「あの日にはもう戻れない」「朝から何を言い出すの？」「でも、時々、何かわけのわからない不安にかられるのよ」「生きていれば不安はつきまとうよ」君は悲しそうに笑う。蓮の香りが二人を包み込んだ。蓮の葉脈のような繊細な君の心模様を僕はそっとなぞってみた。「この蓋のところに描かれているの、落ち葉じゃない？」君はポットを掴み、蓋を綺麗な指先でおさえて、空になった僕のカップにロータス茶を注ぎ足した。お茶を注ぐたび、人々はそれぞれの思い出の名残りに、そっと手を添えるという仕組み。

自分に何が出来るかを僕はこの十年ずっと考えてきた。「朝から言うことじゃないけど」と前置きした。伏目がちな瞳をあげて君は僕を見つめ返した。「ずっとそばにいる。だから安心してほしい。君の不安は僕が一生預かる」「一生？ほんと？」君の瞳が静かに濡れはじめた。君のために僕が出来ることを探していきたいと思った。何事にも丁度いい頃合いというものがある。まさに、それが今なのである。 つづく。

Hitonari Tsuji

1989年『ピアニシモ』ですばる文学賞を受賞。1997年『海峡の光』で芥川賞、1999年『白仏』のフランス語翻訳版『Le Bouddha blanc』で仏フェミナ賞・外国小説賞を日本人として初めて受賞。著書に『サヨナライツカ』『右岸』『永遠者』など多数。近著に『立ち直る力』（光文社）。ミュージシャン、映画監督、演出家など文学以外の分野でも幅広く活動。現在は拠点をパリに置き創作に取り組む。

ROYAL COPENHAGEN

PURVEYOR TO HER MAJESTY THE QUEEN OF DENMARK

https://www.royalcopenhagen.jp

写真左：ブルームスト ティーポット ツリーピオニー 30,000円【数量】
右：ブルームスト マグ ナルキッソス 秋冬発売予定